

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 4 月 18 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380918

研究課題名(和文) 臨床心理学教育におけるナラティブ分析導入プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a program that introduces narrative analysis in the education of clinical psychology

研究代表者

能智 正博 (Nochi, Masahiro)

東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・教授

研究者番号：30292717

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトは、近年広がりを見せる質的研究の教育にナラティブ分析の視点を加えることにより、科学者-実践家としての心理専門職の養成に寄与するプログラムを作成するための基礎を提供しようとするものである。まずは、臨床心理学領域の研究法教育における質的研究の内容と位置づけについて現状を調査し、同時にナラティブ分析の意味とその技法の多様性を整理した。その上で、ナラティブ分析の方法を拡張し、ライフコースのなかで縦断的に変化する自己ナラティブ、さらには、相互作用のなかで生成されるナラティブを捉える方法の確立のための実証研究を行い、その成果に基づく教育を実践した。

研究成果の概要(英文)：It seems that qualitative methods are beginning to be taught in the curriculum of clinical psychology as part of research methodology. This project aimed to provide a basis for making an educational program that produced a clinical psychologist as a scientist-practitioner by adding narrative analysis to the research methodology. First, I investigated contents of qualitative research that were educated in the research class in clinical psychology. Also, significance of narrative approach was explored, and three types of narrative analysis were identified from the literature. Then, applying the extended techniques of narrative analysis, I made empirical research and came up with some practical procedures for understanding self-narratives that changed in the context of life course and self-narratives produced in interactions.

研究分野：臨床心理学

キーワード：臨床心理学 ナラティブ分析 質的研究 専門職教育

### 1. 研究開始当初の背景

心理専門職は実践家であると同時に科学者であるべきだという「科学者・実践家モデル」が広がるにつれて、臨床心理学領域でも研究の重要性も認識されるようになり、質的アプローチも含めた研究法の教育が重視されるようになってきた。しかし心理学関係の学術誌で公表されている質的研究の成果は、現在のところグラウンデッドセオリーなどいわゆるカテゴリー分析に偏っており、ナラティブ分析やディスコース分析などのシークエンス分析的なアプローチはまだ少なく、研究者の学習機会の不足が想像される。シークエンス分析は、従来の分析法では対象化できない現実の側面を切り取るのに有用な分析法であるが、こうした分析法を心理専門職の教育に導入することで、臨床心理の実践をさらに多面的に明らかにすることができるであろう。また、そうした技法を身につけることによって心理専門職の成長も促されることが予想される。

### 2. 研究の目的

今回のプロジェクトでは、次の4つの目的を設定して研究を進めた。

臨床心理学分野における質的研究の教育の現状を、探索的に検討する。

ナラティブ分析を特徴づけた上で、それを学ぶ方法にはどのようなやり方があるかを検討する

ナラティブ分析の方法が臨床心理学的研究に対してもつ意義や貢献について明らかにする

臨床心理学の研究法の教育にナラティブ分析を組み込んだプログラムの構成要素について検討を進め、実践する

最終的な目的は であり、その研究の土台が ~ なのだが、それぞれ独立した学術的意義もあると考えられる。

### 3. 研究の方法

今回のプロジェクトでは、文献研究、実証研究、教育実践を相互に影響させる形で、らせん的に全体を発展させた。

まず については、心理専門職教育の現状を整理する目的で、文献レビューを軸に研究を行い、内外の臨床心理学関係の専門誌を中心に、臨床心理学および質的研究の教育に関わる調査をまとめた。

については、ナラティブ研究・ナラティブ分析のテキストや実証研究を概観し、その諸技法を分類するとともに、文献に加えて学会等のワークショップなども活用して、情報を収集・整理した。

については、臨床心理学領域におけるナラティブ分析とその関連領域について、先行研究をもとにしつつ、自ら臨床心理学領域でナラティブ研究を積極的に実践した。

については、ナラティブ分析にアクセントを置いた質的研究のプログラムに組み込む

べき要素として、ナラティブをやりとりの流れや人生というような文脈のなかで捉えて理解する方法を模索した。

### 4. 研究成果

#### (1) 臨床心理学分野における質的研究の意義と現状 (特に、論文、論文) :

欧米では臨床心理学領域における調査結果が複数公開されている。それらによれば、質的研究法は2000年代以降になるとほとんどの臨床心理学教育に組み込まれるようになったことが明らかになった。特にイギリスでは多様な分析法が扱われているが、最もよく扱われているのはグラウンデッドセオリーとIPA(解釈的現象学的分析)であった。ナラティブ分析の教育は増加傾向にはあるものの、まだ少ないのが現状である。

心理職養成を意識した我が国の大学院プログラムでは質的研究の教育が始まったばかりであり、扱われる質的研究のタイプはさらに限定されている。心理専門職として学ぶべきスキルとの関連から、今回のプロジェクトの報告では、ナラティブ分析およびディスコース分析の学びの機会を増やすことの重要性が提言された。

#### (2) ナラティブ分析の特徴とその多様性 (特に、図書、図書) :

ナラティブ分析は、個人において表出された「物語り」を分析する技法として発展してきた領域なのだが、その名称のもと様々な分析が実践されている。大きく分けて3つのタイプの分析がある。

3つのタイプのうちの1つはナラティブの内容から安定した意味を抽出しようとするものである。グラウンデッドセオリーやIPAを用いて語り手のもつ意味構造へアプローチするやり方もあるが、近年では、個人の体験を人生という文脈のなかで捉えるという、テキストを細かく分割しない分析手続きも試みられている。

2つめは、ナラティブの形式や構造からそこで生成される意味を探っていく方法である。出来事に関して語られた物語りを複数の構成要素に分け、その要素の特徴から中心的な意味を同定したり、要素の組み合わせ方から全体的な意味を取りだそうとしたりする場合もある。

3つめはナラティブの生成を捉えようとするアプローチである。目の前の他者との対話のなかで、あるいは外部の社会的な物語(ディスコース)との関わりのなかで、どのような意味が生み出されているかを、文脈とのつながりを意識しながら分析しようとするやり方である。

今回のプロジェクトの報告では、ナラティブ分析を行う場合、どのタイプのナラティブ分析をどういう目的で使うか意識しておく必要があることが提言された。

#### (3) 臨床心理学教育におけるナラティブ分析の学びの意義 (特に、論文、図書)

J. Bruner は、人は自己や世界を「ナラティブ・モード」において理解しているという見解を示したが、物語りという様式によって、生の体験は初めて理解可能でかつ受容可能な経験となる。心理臨床場面においても、患者やクライアント語りを様々な切り口から取り出し、物語りとして理解するスキルは、彼・彼女に対する共感的理解の基礎にもなるだろう。その意味で、ナラティブ分析のスキルは、カウンセリングや心理療法の実践の土台を提供することにもなると考えられる。

同時に近年では、ナラティブ・セラピーやオープン・ダイアログなど、物語りの生成を促進する介入もまた注目されている。その介入の基礎としてもナラティブ分析の技能は重要かもしれない。特にナラティブの生成に注目した分析の場合には、個々の発話を社会的文脈との関係のなかに置きつつ、物語りとして理解しようとする。その分析に習熟することで、心理臨床的な介入をより正確に方向づけられる可能性がある。

#### (4) 縦断データからナラティブ・アイデンティティの生成変化を探る方法の探索 (特に、論文、論文)

失語症事例のナラティブ研究を通じて、長期縦断研究における人生という文脈の影響を検討する視点を提示した。この研究においては、前回インタビューを行ってから15年の期間を経て再インタビューを行い、対応する2セットのデータに対してナラティブ分析を行った。同じエピソードへの言及など比較の土台を設定したあと、言語的・意味的な比較を行い、そこで見いだされた変化の背景として、年齢とそれに応じた発達課題からの影響を論じた。

また、先天性の全盲児の療育を縦断的に記録したビデオの分析を通じて、周囲の大人とのやりとりから「障害をもっている」という気づきとアイデンティティが形成される過程を抽出した。注目したのは、児が盲児には体験できない「見る」に関連する語の用法であり、それがやりとりのなかでどういう反応を引き起こしたのかであり、会話分析やディスコース分析の技法を用いて広い意味でのナラティブ分析的な検討を進めた。結果として示唆されたのは、「見る」という行為を示す語はまず比喩的に用いられたり言語行為として使われたりした後、健常児と同様の意味をもつ「見る」に近づいていくという点であった。盲という自分の属性への気づきとそれを示す自己語りに至る過程を明らかにするための方法として、ナラティブ分析の方法を拡張することの可能性が示された。

#### 5. 主な発表論文等

##### 〔雑誌論文〕(計 11 件)

能智 正博、園部 愛子、片山 皓絵、横山 克貴、眞柄 翔太、「見る」に関する先天性盲児の言語使用の発達 療育場

面の縦断的な映像記録の質的分析から、東京大学大学院教育学研究科紀要、査読無、40 巻、2017、印刷中

能智 正博、障害と自己の意味を継続的に更新する失語症の事例 20年にわたる語りの変遷から、The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine, 査読有、53、2016、pp.941-944

DOI:10.2490/jjrmc.53.941

能智 正博、金 智慧、眞柄 翔太、全盲児の成長と療育過程の縦断的分析 (1): 1歳から2歳まで、東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要、査読無、39 巻、2016、pp. 50-57

園部 愛子、川上 侑希子、能智 正博、全盲児の成長と療育過程の縦断的分析 (2): 3歳から6歳まで、東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要、査読なし、39 巻、2016、pp. 58-65

松下 弓月、川上 侑希子、眞柄 翔太、能智 正博、臨床心理学的実践の学びにおける質的研究の意義(1)、東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要、査読無、39 巻、2016、66-73

横山 克貴、堀内 多恵、古井(橋本) 望、能智 正博、臨床心理学的実践の学びにおける質的研究の意義(2)、東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要、査読無、39 巻、2016、74-81

広津 侑実子、能智 正博、ろう者と聴者の出会いの場におけるコミュニケーションの方法 手話を用いたインタビューの会話分析から、質的心理学研究、査読有、15 巻、2016、124-141

能智 正博、「発達論的還元」の射程 浜田論文へのコメント、心理学評論、査読無、57 巻、2014、330-336

能智 正博、3年目の「被災者の声」はいかに語られるか(1) 序論、東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要、査読無、37 巻、2014、64-70

北村 篤司、能智 正博、子どもの「非行」と向き合う親たちの語りの拡がり—セルフヘルプ・グループにおけるオルタナティブ・ストーリーの生成に注目して—、質的心理学研究、査読有、13 巻、2014、116-133

能智 正博、臨床心理学における質的研究のあり方と可能性、臨床心理学、査読無、13 巻、2013、352-355

##### 〔学会発表〕(計 9 件)

能智 正博、園部 愛子、片山 皓絵、横山 克貴、眞柄 翔太、「見る」に関する先天性盲児の言語使用の発達 -療育場面の縦断的な映像記録の質的分析から-、日本発達心理学会第28回大会、2017.3.25、広島国際会議場(広島県) 能智 正博、園部 愛子、金 智慧、川上 侑希子、眞柄 翔太、先天性盲児の

自己像の初期発達 療育場面の映像の質的分析から、日本教育心理学会第58回総会、2016.10.8、サンポートたかまつ(香川県)

能智 正博、失語と向き合う20年 障害の語りの変遷から見えるもの、日本「祈りと救いところ」学会第3回学術研究大会、2016.11.12、ホテルメトロポリタン(東京都)

能智 正博、“病いの語り”のとらえかた、第20回日本摂食障害学会学術集会、2016.9.4、東京大学(東京都)

Nochi, M., Is learning qualitative research really beneficial to improve the professional skills for students of clinical psychology? 34th International Human Science Research Conference. 2015.8.12、Trondheim (Norway).

能智 正博、当事者の語りを読み解く、NPO 法人日本脳外傷友の会全国大会・全国高次脳機能障害相談支援コーディネーター研修会、2015.11.20、品川区キュリアン(東京都)

能智 正博、語りを読み解く 質的分析の質を高めるために、日本パーソナリティ心理学会第23回大会、2014.10.4、山梨大学(山梨県)

Nochi, M. & Okishio, M., Revising a life-story as a dialogical process: Qualitative analysis of an autoethnographic project. 8th International Conference on the Dialogical Self. 2014.8.20、Hague (Netherlands)

能智 正博、質的研究法入門 「語り」からモデル構成へ、日本学生相談学会第31回大会、2013.5.18、琉球大学(沖縄県)

〔図書〕(計 5 件)

Nochi, M. 他、ひつじ書房、Frontiers in developmental psychology research: Japanese perspective、2016、288(81-96).

能智 正博他、ミネルヴァ書房、ディスコースの心理学 質的研究の新たな可能性のために、2015、235(3-23, 135-153)

能智 正博他、新曜社、ワードマップ TEA 理論編、2015、185(74-78)

能智 正博他、エスコアール出版、認知世界の崩壊と形成 神経系の損傷に伴う視覚障害を手がかりに、2014、367(341-366)

能智 正博他、新曜社、質的心理学ハンドブック、2013、583(71-94, 324-343)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

能智 正博(NOCHI, Masahiro)  
東京大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号： 3029717

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )